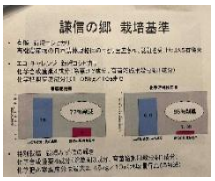
粕谷。猛暑ですが、この写真から一時の「涼」を。８月４日、多摩川の浅川合流付近での毎月の野鳥定期カウント。対岸の国立市と府中市の境界線あたりにダイサギ 30 羽が集結し、そこにカワウ 60 羽が着水して絵になる光景が現れました。「カワウが集団で追い込み漁を始めるのでは」と期待しましたが、直ぐに下流方向へ移動してしまいました。

紅葉台 新聞

第１９９号
２０２５年
９月１３日
発行人：関谷　孝

生産者に聞く　産直米「謙信の郷」



昨年より、米不足となり、値段がこれまでの 2 倍以上も値上がりしました。消費者にとって物価高に加え主食のコメの値上がりは大問題です。その対策として古古古米が市場に出回りました。値段が2000円と値下がりしましたが、今後の食料自給への不安は解消されません。しかし、この騒動から日本のコメ農家が抱える問題が明らかになってきたのではないでしょうか。私達消費者も日本の食を支える農業の現実を知ることから米不足の問題を考えたいと思います。（以下、調べたことをまとめました）

原因	内容
減反政策の継続	政府が米価維持のために生産量を抑制。2021 年以降、消費量が生産量を上回るようになり、供給不足が顕在化。
備蓄米の放出遅れ	2024 年夏のコメ不足時、政府は「コメは余っている」として備蓄米の放出を拒否。放出が始まったのは 2025 年 2 月。
異常気象による不作	猛暑や台風などの影響で、2023 年以降の収穫量が減少。特に一等米の割合が低下し、品質面でも影響。

2020 年：生産量　約 723 万トン、消費量　約 714 万トン
2023 年：生産量　約 661 万トン、消費量　約 705 万トン　→ 約 44 万トンの供給不足

今後の課題と展望

農業政策の見直し	減反から増産への転換が必要
備蓄体制の強化	緊急時に迅速に対応できる仕組みづくり
若手農家の支援	スマート農業や所得補償制度の導入
消費者意識の変化	国産米の価値を再認識し、持続可能な食文化を守る

今回話を伺ったのは、BM 自然塾有限会社謙信の里・農家の長男で都会からユータウンし、実家の後継ぎとなり専業農家を 20 年以上している金谷さんです。開口一番「田んぼはトンボや野鳥、水生昆虫等生き物がいっぱいいます！！こんな田んぼは今では貴重です！！」と話していたのが印象深かったです。その生きものの写真を沢山資料につけて紹介してくれました。

BM 自然塾有限会社謙信の里は農薬、化学肥料を低減、もしくは使用していない農産物の販売を目的に旧頸城村の 3 人の生産者によって 1997 年に設立された会社です。現在は旧三和村、旧浦川原村、旧上越市の生産者を含む８生産者が出資、運営し、環境保全型農業によって生産されたお米の販売を行っています。特に有機新潟コシヒカリ、エコチャレンジ新潟コシヒカリ、特別栽培新潟みずほの輝きは、栽培基準を標準に比べ 70%から 80%以上削減した農薬や化学肥料を抑え、有機栽培米を作っています。特に土作り、種子などは殺菌にお湯を使い、病原菌やカビなどの侵入を防止しています。またカルガモならぬアヒルやマガモによる雑草駆除をしています。天敵のキツネなどフェンスを張り巡らせお米作りに励んでいます。今年はほとんど雨が降らず干ばつです。水はとてもお米作りに必要なので心配です。また猪や鹿などの食害も大きな問題になっています。

20年ほど前から低農薬有機栽培を始め珍しい生き物がたくさん増えてきたのは嬉しいことです。このような田んぼは大変珍しいとのことでした。

また驚いたことに稲作農家の平均時給は 2022 年度 10 円 2023 年度 97 円になり、労働力に見合わない過酷な仕事になっているのが実態です。農家が減り耕作放棄地が拡大しています。農家の平均年齢は 69.8 歳（2022 年度）ですから、もう既に 70 歳を超えています。また資材や農業機械の高騰、大規模農家も経営難になっています。謙信の里は生協との確実な契約により生産したお米を安定した価格で出せる仕組みが出来上がっているので、安心してお米作りをしていると話していました。また最近の米の高騰は生産労力に見合うものではなく、もともと低く抑えられているので、生産者の生活は大変危機的な状況にあります。金谷さんの話をまとめると「今後現状農業経営世帯への所得補償制度や生きがいを持って米作りができるシステムを築いていく必要がある。多様な形態が残れる状況を作り、地域や自然環境を守っていくことも大切。また低賃金長時間労働が当たり前の状況では、若い人たちに職業として選んでもらう事は難しい。そして近い将来食べ物を作る人がいなくなってしまうと言う懸念があります。農家も生活ができ、消費者の方も納得できる価値とともに安全で安心な農作物を安定的に手に入れられる。そのような米作りが求められています。その 1 つの解決策としての産直があるのでは」と話していました。長年の交流を通して相互に思いやれる関係を築いてきた産直交流は日本の農業の未来を照らす光になってほしいと願っています。

粕谷和夫の観察日記

涼を求めて尾瀬に行ってきました（7月 23 日～24 日）。今回のコースは福島県の檜枝岐村・御池ロッジに 1 泊して沼山峠までシャトルバスで入り大江湿原と尾瀬沼までを往復する高齢者向けルート。大江湿原では咲き誇るニッコーキスゲを期待しましたが、ここもシカの食害を受け、花はまばらでした。しかし、湿原は天然クーラー、さわやかでした。湿原で思い切りさえずるホオアカ**（写真左）、尾瀬沼湖畔の高木のてっぺんの**モズ**（雛と思われる）の眼が輝いていました。**

紅葉台新聞は、「高尾フモト同盟」の HP に公開されています。高尾の情報や働く人たちが紹介されています。興味を持った方は、覗いてみてください。また、皆様からの情報や投稿もお待ちしています。